

造幣局本局 見学レポート



いよいよ「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとする大阪・関西万博が目前に迫ってまいりました。桜の通り抜けで有名な造幣局ですが、万博の記念硬貨もこちらで製造されています。近年、SDGsの達成に向けて、持続可能な社会の実現が求められていますが、造幣局でも高度な技術と、素材開発等を駆使し、環境への配慮や社会貢献活動が行われていると聞いています。今回は最先端の技術と、長い歴史を持つ伝統的な製造工程がどのように融合されて、貨幣・記念硬貨が発行されているのか、りょうわ小町のメンバーで見学してまいりました。

【造幣局の歴史】

明治新政府は、近代国家を建設するにあたり、幕末の乱れた貨幣制度を立て直す必要があると考え、先進諸国の貨幣に劣らない貨幣を製造するため、河川が多くあり機械や貨幣の材料を運ぶ船の輸送に便利な大阪に造幣局を設立しました。そのため造幣局の建物は全て川の方に向けて建てられています。

造幣局は、明治4年（1871年）4月4日に創業式を行い、その当時としては画期的な西洋式設備によって貨幣の製造を開始し、明治初期における近代工業をわが国へ紹介する役割を果たしました。

【造幣局編】



【造幣局の組織及び業務】

造幣局は、貨幣製造を主な業務とする独立行政法人であり、大阪市に本局、さいたま市及び広島市に支局をおいています。造幣局では、次の事業を行っています。

- ① 貨幣製造事業（行程①、②はひろしま支局）
- ② 装金事業（勲章・褒章及び金属工芸品の製造）
- ③ 試験・検定事業（貴金属製品の品位照明、地金・鋳物の分析及び試験、貴金属地金の精製・品位照明）
- ④ 貨幣販売事業（貨幣セット、プルーフ貨幣セットの販売）

※収集用のプルーフ貨幣、記念硬貨、勲章、褒章、金属工芸品は主にさいたま支局



ひろしま支局での工程

工程③④⑤⑥で出たシスル(端材)や回収された古い貨幣等もひろしま支局に戻され再度貨幣の材料になります。

おおさか本局での工程

近年、硬貨の製造は減少傾向にあります。

特に1円玉は平成28年以降、大阪ミントショップで販売されている貨幣セット分のみの製造となっています。

※詳細は添付資料「年銘別貨幣製造枚数表」をご覧ください。



【博物館編】

ここからは自由見学になります。

時価1億円以上の天正菱大判の実物が展示されています。

豊臣秀吉が京都の金工師、後藤祐徳に作らせたもの。世界に6枚しかなく、造幣博物館にあるものはそのうちの1枚。本物です！



【小町メンバーの感想】

・自動販売機に受け入れてもらえない、通称「ギザ10」が実は約6年間のみしか製造されていなかった珍しい硬貨だったことを初めて知りました。また、硬貨の周囲にギザギザが付いている理由が、当時一番高価なコインだったということから、たった7年で100円硬貨が登場するほどに、日本の経済が急速に発展したことがわかりました。硬貨の発行種類や枚数によって、社会情勢が伺えることが大変興味深かったです。荒木

・造幣局の見学は非常に興味深かったです。特に、貨幣製造の工程がほぼオートメーション化されており、機械の正確さや効率性が、緻密なデザインが施された硬貨の高い品質を支えていることを実感しました。普段何気なく使っているお金が、効率化と徹底した品質管理のもとで作られていると知り、業務をどのように最適化していくかという点で、自分の仕事にも活かせるヒントを得たように感じました。小舟

・造幣局で製造されているのが、貨幣だけでなく、オリンピックメダルや勲章、品質の認定等も担っていることを初めて知りとても興味深かったです。勲章の写真を撮りたかったのですが、勲章は撮影禁止とのこと、残念でした。(造幣局内で撮影禁止はここだけでした。) 小田

・今回の見学会で初めて造幣局見学へ行きました。硬貨の作り方も公開されていること、普段使用している硬貨をより深く知ることができました。生活に欠かせない硬貨が時代により変化していることに面白さを感じました。中でも当時最高額の硬貨にギザギザの縁加工が施されていること。今となっては、昔に使用されていた10円玉がレアとされているなど知らない話が聞けたことなどです。見学後財布の中に入っている硬貨の発行年を確認してみました。ギザありの10円玉、令和の1円玉は見当たりませんでした。幸喜

【まとめ】

貨幣の歴史から最新鋭の技術までを無料で見学でき、見どころ満載の造幣局にぜひ皆さんも桜の綺麗な季節に訪れてみられてはいかがでしょうか。